

〔センター15周年・研究科10周年記念号によせて〕

「何する人ぞ」から「何かをする人」へ

札幌学院大学大学院臨床心理学研究科 市川 啓子

私が心理臨床らしきことを始めてからちょうど30年になる。「らしきこと」などと表現したのは謙遜ではなくて、カウンセリングが今よりまだ一般的には知られていない中、本を片手に目の前の悩める人々に何ができるかを手探りで模索していた時代だったからである。当時、身近な人からは「そんなしんどそうなことをどうして続けているの？」と訊かれたことを思い出す。そのしんどいことをなぜかやめられない仲間が、お互いに支え合いながら細々と勉強していたのも今は昔である。

10年前、私は臨床の現場を何箇所か掛け持ちする日々を過ごしていたのだが、本学に臨床心理学研究科が設けられたと聞いた時、ああやっと、という思いと同時に、体系的に臨床心理学を学ぶことができる若い人々にうらやましさを覚えたのを覚えている。

～．．．～

ところで、わが国で「カウンセリング」や「臨床心理学」が市民権を得始めたのは、全国の学校にスクールカウンセリングが導入された時期あたりからなのではないだろうか。子どもたちをめぐるさまざまな事件が多発し、マスコミが大々的に子どもたちの心の育ちに異変が起きていることを取り上げた時と重なる。それまで、大学での学生相談や病院小児科での心理臨床に携わっていた私にとっては、このスクールカウンセリングは大変興味深く映った。病院等を訪れるクライアントといわれる人々は、程度の差はあれ来談の動機がある。そして、ある枠組みを持った継続的な関わりの中で、一定の心の変化がみられるケースも多い。すなわち明らかな不適応感や不登校・身体症状など問題が顕在化していることで関わりの焦点が比較的見えやすいといえる。しかし、私たちが臨床の場で見ているものは、氷山でいえば先端の部分でしかなく、子どもの問題の見えない裾野はもっと広く、もっと深刻な状態になっているのではないかという危機感が私の中で強まっていた時期だった。

子どもの問題が最も顕在化しやすい「学校」での臨床に思いが強くなり、スクールカウンセリング導入開始2年目から約8年間、小学校・中学校・高等学校にカウンセラーとして関わる機会を与えていただいた。

15年を迎えようとする現在、スクールカウンセリングは教育現場に広く認められつつあるが、最初の頃は、配置先の学校で先生方の「何する人ぞ」といったやや冷ややかな視線を受けつつ始まったといって過言ではない。私自身、今でもある小学校でのエピソードが忘れられない。もう時効にしてもよい時間の経過があるので、昔話として話せるのだが…。

スクールカウンセラーとして出勤した最初の日、小さな部屋に案内された。懐かしさの漂う木造の校舎は、職員室や保健室等の管理棟と教室棟が分かれており長い廊下でつながっていた。そしてその途中にある小さな突起のようなスペースが相談室として割り当てられた部屋だった。直前までうさぎ小屋として使われていたということで、独特の匂いが満ちていた。私の最初の仕事は、消臭剤を数個買い求めることだった…。

必ずしも恵まれた条件ばかりではなかったが、スクールカウンセラーとして過ごした8年間に学んだことは言葉に尽くせないほど多く、その後の仕事の原点にもなっている。体験しなければ「学校時間」の速さと濃密さはわからなかったと思うし、そこで過ごすには子どもにとって大きなエネルギーが必要であることも理解できなかっただろう。かれらにとって、学校に居場所がなくなるということがどれほど恐ろし

いものかも実感できる。それにしても現代の学校集団の中の子どもたちは何と生きにくくなっているのだろうか…。

～・・・～

この10年で、世間からみた臨床心理士は「何する人ぞ」から、何かをする人、何かをしなければならない人、に変化しているように思える。さまざまな領域で、多職種の専門家との協働が必要とされることが多くなった昨今、初期の頃とは違った厳しさがそこにはあると思われるが、私たちは本当に世の中の期待に応える力を培っていけるだろうか…。私個人としてはそろそろもうこの仕事を閉じる時期なのだが、気がかりなことの一つである。